

## 「何もない」ところから創り出す 空気感を含めたトータルデザインを提案



### 丹羽 浩之

Hiroyuki NIWA

void OFFICE  
公益社団法人日本インテリアデザイナー協会  
理事長

<https://void-jp.org>

丹羽浩之氏は、建物の設計だけでなく、インテリアや食器、店名やサービスに至るまで、総合的なデザイン提案によって空間全体を創り上げていきます。目に見えないが確かに存在する「空気感」を伝えることを一貫して追求する丹羽氏の目は、そこから生まれる新しい生活や環境をしっかりと捉えています。

建物本来の役割を考え  
「空間デザイン」を追求

私は美大の建築学科を卒業し、同大学ゼミに在籍しながら徐々に仕事を始めるようになりました。しばらく東京で活動していたのですが、親の健康上の理由などもあって地元である名古屋に戻ることにしました。拠点を名古屋に移した後も、岐阜県で設計集団の多治見中学校のプロジェクト

トにコンペから設計・監理まで参加するなど様々な経験を積み重ね、またその他のいろいろなタイミングもあり、2000年に独立し「void」を設立しました。

私の仕事としては建築の設計がメインではありますが、インテリアなども含めたトータルでの空間づくりにこだわってデザインしています。というのも住宅の設計では、完成後の細かな住まい方などをしっかりヒアリングする人ももちろんいますが、中には実際の使用シーンをあまり考慮せずに作品として成立させて終わってしまう人もいます。しかし本来、住宅建築であるなら生活感があっても美しさや心地よさを感じさせるように設計されていなければなりません。そのため、家具やインテリアなども含めた全体の雰囲気を考えながらデザイン

に通って絵画や彫刻を学んでいま

した。単に楽しくて通っていたということもあつたのですが、その一方で芸術を続けていても自立して生活していくことが難しいということも分かっています。進路を決める時期が近づくにつれて焦りは大きくなっていきました。

そこで私なりにいろいろなとを考えてみた結果、一つの解決策としてたどり着いたのがデザインの仕事でした。デザインであれば、芸術的な自己表現をしながらも、商業ベースの活動をすることで収入が見込めると考えたのです。

そしてその中でも、彫刻が好きだったということもあり、彫刻と建築を結びつけて考えてみました。彫刻は、もちろんオブジェそのものが彫刻ではあるのですが、それだけでなくオブ

ジェを置くことによつて、その場の空気や光、風などの変化が生まれます。

一つのオブジェが人の空間認識に影響を与える、このことを含めて彫刻と成るといふことです。そうした時、この天井や壁を囲って箱にしてしまったら、その箱に建築もまた彫刻といえるのではないかと考えたのです。そうすれば、商業ベースに乗ったふりをしつつも、自分の中にある芸術性のある程度は打ち出すことができ、つまりお金をもらいながら自分でコントロールして表現することが可能になるのではないかと考えました。

アートだからといって一切迎合しないということではなく、迎合しつつも裏では様々な意図を考え策略を張り巡らせていく、そんな面白いことができているのではない、建築の道へ進むこと

する必要があると思っています。完成直後の写真ではかっこよく見えていたとしても、実際に住んでみたら構造や性能などの面で住むことに向いていなければ、住宅として作る意味がありません。だからこそ、単に「住宅を作ること」を目的にするのではなく、実際に人が住んだ時のことをイメージしながら設計しています。

レストランやホテルなどを計画する際も、店名から料理のメニュー、食器、ユニフォーム、アメニティなど、建物の設計以外の要素も全て含めてコントロールできるように心がけています。必要に応じて自らプロダクトをデザインするケースもあり、「空間をデザインする」ということに対しては強いこだわりを持つて取り組んでいます。

彫刻に対する興味から建築の道へ  
商業性と表現の両立を目指す

建物全体の空間・空気を考えることは建築にとつては非常に重要で、私自身もその点に面白さを感じて建築を専攻しました。私は小さい頃から絵を描くことが好きで、高校は毎年多くの東大入学生を出すような進学校だったので、そんな学校にいな

がら私にはアートスクールの予備校に決めたのです。

そのため、建築の仕事をする際はオブジェを作るといふ考えではなく、その周辺に漂う空気・空間をデザインするということを常に意識して取り組んでいます。社名の「void」は「無」「何もない」という意味で、建築の図面で吹き抜けを描く時に使う言葉です。見たり触れたりできないが感じられるもの、そういった空気感をしっかりと伝えられるようにデザインしていきたいという思いが、この「void」という社名には込められています。

従来の価値観ではなく

未来を見据えたデザインを

これまでに取り組んできたプロジェクトの中でも、名古屋のミッドラ

#### ■にわ ひろゆき プロフィール

有限会社VOID代表  
公益社団法人 日本インテリアデザイナー協会理事長

#### 略歴

1994年武蔵野美術大学建築学科卒業。その後、ランドスケープ事務所・建築設計事務所を経て、2000年にVOIDを設立。

#### 受賞歴

「愛知文化服装専門学校」  
・A' Design Award 2019 銀賞  
・TID AWARD 2019 The TID Award  
・2020 IFI DESIGN DISTINCTION AWARDS BRONZE

「古崎東京オフィスビル」

・A' Design Award 2018 金賞  
・DSA 日本空間デザイン賞 2017 入選

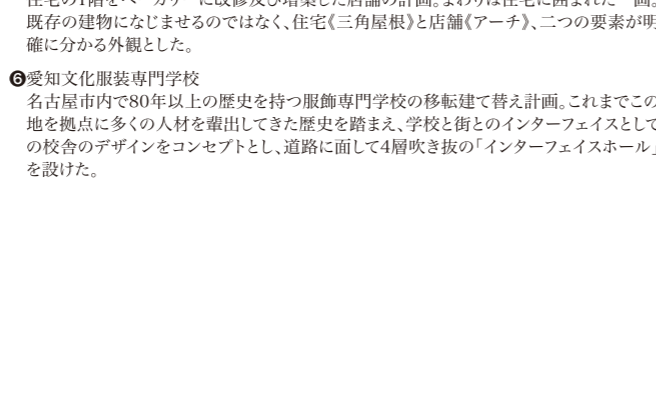
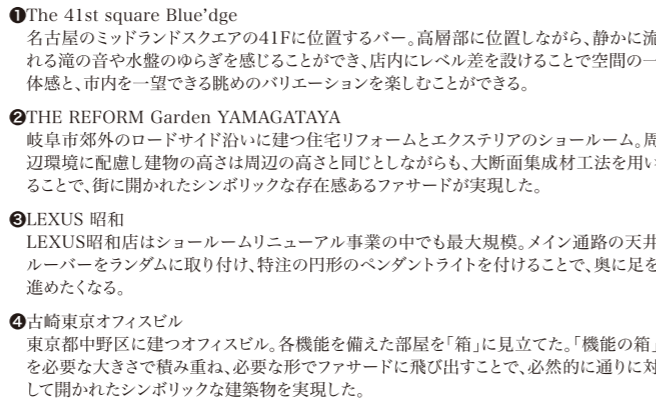
「LIXILショールーム名古屋」

・GOOD DESIGN AWARD 2016

「The 41st square Blue'dge」

・北米照明学会2008年度IDA 2008 Award of Merit (IES)/  
北米照明学会 Edwin F. Guth(Interior)メリット賞(優秀賞)  
・照明学会東海支部 優秀照明施設 東海支部長賞

など多数



① The 41st square Blue'dge  
名古屋のミッドランドスクエアの41Fに位置するバー。高層部に位置しながら、静かに流れる水の音や水盤のゆらぎを感じることができ、店内にレベル差を設けることで空間の一体感と、市内を一望できる眺めのバリエーションを楽しむことができる。

② THE REFORM Garden YAMAGATAYA  
岐阜市郊外のロードサイド沿いに建つ住宅リフォームとエクステリアのショールーム。周辺環境に配慮し建物の高さは周辺の高さと同じとしながらも、大断面集成材工法を用いることで、街に開かれたシンボリックな存在感あるファサードが実現した。

③ LEXUS 昭和  
LEXUS昭和店はショールームリニューアル事業の中でも最大規模。メイン通路の天井ルーバーをランダムに取り付け、特注の円形のペンダントライトを付けることで、奥に足を進めたくなる。

④ 古崎東京オフィスビル  
東京都中野区に建つオフィスビル。各機能を備えた部屋を「箱」に見立てた。「機能の箱」を必要な大きさに積み重ね、必要な形でファサードに飛び出すことで、必然的に通りに対して開かれたシンボリックな建築物を実現した。

⑤ Brot yanagi  
住宅の1階をベーカリーに改修及び増築した店舗の計画。まわりは住宅に囲まれた一画。既存の建物になじませるのではなく、住宅(三角屋根)と店舗(アーチ)、二つの要素が明確に分かる外観とした。

⑥ 愛知文化服装専門学校  
名古屋市内で80年以上の歴史を持つ服飾専門学校の移転建て替え計画。これまでこの地を拠点に多くの人材を輩出してきた歴史を踏まえ、学校と街とのインターフェイスとしての校舎のデザインをコンセプトとし、道路に面して4層吹き抜の「インターフェイスホール」を設けた。

ンドスクエアという超高層ビルにある「ブルーエッジ」というバーの設計は、コンセプトが色濃く反映された特徴的なデザインだったといえます(写真①)。高層階の展望を活かすために壁がガラス張りになっていて、窓のサッシのところに水を張ることが出来る水やゆらぎを感じることが出来る空間にしました。雲の上に池が浮いている、そして池の上に席が浮いているという、重力に逆らう設計となっており、常識を少し疑うような要素を盛り込みました。また、店内を上段・中段・下段の3層に分けることでお客様の視線が重ならないようにし、市内を一望できる眺めのバリエーションを楽しめるようにしている他、デート中のカッパルや仕事の接待で利用するビジネスマンなど、様々なお客さんがそれぞれの目的で利用することができる作りになっているのも特徴です。ここでも食器やユニフォームなども含めて、トータルでデザインさせてもらいました。

YAMAGATAYAのショールームでは、周辺の環境に配慮して建物の高さは抑えながらも、大断面集成材を用いることで連続する大規模な柱と梁、深く大きい軒、長く大きな屋根が可能となり、街に開かれたシンボリックな存在感のあるファサードを実現しています(写真②)。また、私の中ではこの建物自体を人体に見立てるといった裏テーマがあり、皮膚をめくると血や肉が見えるように、建物内の壁を削った断面を全て木目にするというこもしています。毎回、隠れたテーマやストーリーのようなものを設け、作り手側のエゴを押し付けるのではなく、こっそりと入れ込むようにしています。こうした仕業もまたデザインの面白さというか、醍醐味のかなと思っています。

また、最近ではオフィスや住宅などの案件も増えてきています。特にオフィスに関しては活用方法が多様化しており、さらにコロナ禍ということも踏まえ、これまでのような単なる詰め込み型のオフィスではなく、新しい要素をどのような形で取り入れていくかを考えながら取り組んでいます。現在進めている案件では、自社オフィスでありながら社外の人も自由に使えるエリアを作り、シェアオフィスのような使い方ができるようにしました。また、1階にホールを作った地域の人たちが自由に交流できる公民館のようなスペースを設けるなど、これから先を見据えた地域密着型の取り組みとしてプロジェクトを進めています。

今後は、これまでのような建築の仕事だけでなく、様々な人や団体をつないで新しい取り組みができれば、と考えています。通常の仕事であれば、ある程度のチームが組めていれば、やはり常に同じチームでは新しい発想は生まれてこないと思います。私は現在、日本インテリアデザイナー協会の理事長も務めているので、その任期中に外部団体や異なる世代の人たちとの交流も積極的に行っていくことでシナジーを生み出せるように働きかけていきたいと思っています。